

尾形敏彦先生と私との出会い

山 田 正 雄

此の度、尾形先生が佛教大学での一応の一区切りをお迎えになるということを知り、一瞬私は驚いた。しかし、次の瞬間、いつも若々しくお健やかな先生のことを感心しながら、私は納得した。

先生のご研究は『エマソンとソーロウの研究』、『エマソン研究』、『アメリカ文学研究双書』全五巻、『ルバイヤート』、『詩人エドガー・アラン・ポー』、『ウォルドー・エマソン』と枚挙にいとまがない。先生の研究領域の広さと深さには驚くほかはない。

先生のご趣味が絵画や音楽といった芸術趣味だけでなく腕時計や写真機などの精密機械の収集と幅広いことに驚くことばかりである。

先生と初めてお目にかかったのは、昭和44年に私がまだ学生時代を謳歌していた愛知大学で、京都大学に奉職しておられた先生にアメリカ文学特殊講義をしていただいたときである。あのときから、実に21年という時の流れの速さに私は驚いている。しかし、それよりも私はこれまでに先生のお話をうかがうたびに驚くことが多いのを知って一層驚いている。先生の講義に強い関心を抱いた私が、研究室をお訪ねしたときに受けた印象は今もなお鮮やかに思い出すことができる。確か、エマソンに関する感想とか質問をと思って研究室のドアをノックして開けた瞬間、私は先生の堂々たる体格に圧倒された。当時、小柄な池田先生とは異なって研究室には青少年時代に柔剣道で鍛えられた尾形先生がおられたのである。ともあれ、「先生、[emá:son] はですね」と私が切り出すと即座に、先生は「[éməsn] です。」と丁寧に戻り教えてくださった。そのうちに、「エマソンは膨大な日記を書いています」と先生が話してくださると、生意気盛りで無鉄砲な私は、「全部お読みになりましたか？」とか、エマ

スン研究を着々と進めておられた先生に対して、「エマスン研究は研究者の数だけあってもよいのではないのでしょうか？」という言葉を出してしまいましたが、あとの祭りであった。驚いたことに、先生は「京都でエマスン研究の旗揚げをしましょう」と語ってくださった。希望に燃え謙虚で爽やかな先生のお人柄に私は文句なしに惹かれ深い感動さえ覚えたことを今もなお記憶している。

人生の道に迷っていた大学卒業直後の私の手紙に、Perry Miller の本を読むように奨めてくださる傍ら、「森のソーロウですね」という先生の返事をいただいたとき、私は入洛を勧めて下さったものと勝手に決め込んで入洛したこともつい昨日のこのように思い出す。

思い起こせば、今日まで私が先生から賜った精神的援助には測り知れないものがある。ある時期に逆境に身を置いた私に、先生は「希望こそ死中の活だ」と激励して下さったり、「師を乗り越えよ」とも勇気づけてくださった。また別の機会に、先生は「銘柄入りの作品を作れ」と研究者の心意気だけでなく、先生の恩師石田憲次先生直伝の「頼まれたら引受けよ」という処世訓も教えてくださった。不思議なことに、このような先生のお言葉は今もなお私の心に焼きついている。人生の早い時期に先生にお目にかかることができたことを思うと、私は極めて幸運な一人であったとしみじみ感謝の気持ちが込み上げてくる。これまでに、幾度も心に残る貴重なお話をしてくださった先生は私の人生にとって重大な導きの星であると思っている。

平成四年四月から佛大大学院で教鞭をとられることとうかがっていますが、先生の今後の益々のご健勝とご多幸をひたすら念じ上げている次第です。